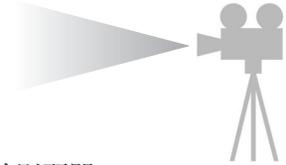




映画とその時代 ⑦



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

銀座という街は、昭和30年代の半ば頃までいわばひとつの（島）だった。東西南北はすべて掘割で囲まれ、いずれかの橋を渡らなければ銀座には入れなかった。そしてその事が、この街に格別の情趣をもたせていたと言えるだろう。

まだ若い頃の夕暮れ時、たとえば有楽町から数寄屋橋を渡ったり、汐留川を土橋で越えると、川の水面上に色とりどりのネオンが反映し、これから花の銀座に足を踏み入れるというときめきを感じたものだ。橋を渡りながら、それまでの日常的な（ケ）の時間が次第に（ハレ）の気分になってゆく。まさにその頃の銀座は、水に浮かぶ（花の都）の風情をもっていた。

昭和39年の東京オリンピックがこの街を大きく変貌させる。容赦のない都市改造のエネルギーが、片端から掘割を埋め立て、高速道路やアーケードに変えてしまう。水を失い柳並木も消え去った今の銀座は、何の変哲もないのっぺらぼうの街にすぎない。

大正12年の関東大震災で東京の中心部はほとんど灰塵に帰した。復興は思いの外に早かったが、なかでもいち早く輝きを取り戻したのは銀座だった。昭和7年、四丁目の交差点に服部時計店のビルが出現する。現在の和光だ。この荘重な風格を

もつオブジェが、それ以降この街のランドマークになっている。そしてその頃に、東京の中心的盛り場がそれまでの浅草から銀座に移り、世界にも知られるようになった。

その銀座の全盛時代を数多くの映画が映像に残している。そのひとつ昭和12年の『花籠の歌』では、一番最初に埋め立てられてしまった三十間堀川を大きく俯瞰で捉え、カメラが近寄ると、今は消え去った三原橋とその上を走る当時の市電がいきいきと映し出される。この構図は何とも貴重な史料だ。オリンピックが2年後に迫った昭和37年の『如何なる星の下に』では、埋め立て直前の築地川と聖路加病院周辺の美しい水景や、戦火を免れた佃島の昔ながらの家並、さらに長く風物詩になっていた渡し舟の姿を、いとおしむようなカメラ目線で残している。

国中が廢墟と化した敗戦後の歲月。オリンピックはまさしく（坂の上の雲）だった。人びとはひたすら上を見上げ、前だけを向くしかなかった。

映画というメディアにはさまざまな役割がある。時代が移ろうなかで、失われてゆくものや消え去ってゆくものの重さを、静かに映像世界に刻みつけるのも、その使命のひとつに違いない。——